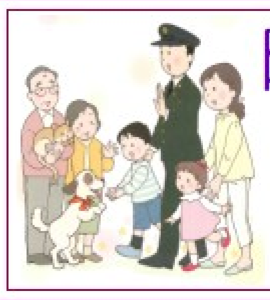
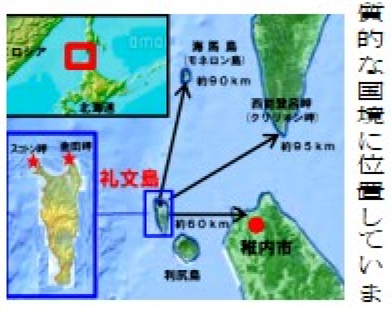


隊員と家族をつなぐ　家族会ほっとライン

「最北の自衛隊　礼文分屯地」

第301沿岸監視隊派遣隊長 兼ねて 礼文分屯地司令　3等陸佐　中川　崇

この記事を書いている9月下旬「日本列島は厳しい残暑が続いています！」とテレビは連日、残暑・酷暑を伝えておりますが、ここ礼文島は最高気温も20℃程度で涼しい毎日、野原にはススキの穂が開いています。今回、陸上自衛隊礼文分屯地の紹介の機会を得たことに感謝いたします。



礼文島の概要について

礼文島は、北海道稚内市から西へ約60㎞。宗谷海峡を挟んで樺太に隣接し、実質的な国境に位置しています。

島の地積は、南北約29㎞、東西約8㎞、総面積約82平方キロメートルであり、日本の島の面積ランキング2位（本土5島を除く）です。礼文島はウニ、ほっけ、昆布などの海産物の宝庫であるとともに、別名「花の浮島」とも呼ばれ、4月から8月にかけて、本州では海抜2000㍍以上でなければ観賞できない高山植物を海抜0㍍から観賞できます。

また、熊、鹿、キツネおよびヘビは生息しておらず、安心して野原の散策が楽しめる島です。

礼文島の歴史は古く、今から約4000年前の遺跡も見つかっております。島の人口は昭和中期に最大1万人を超えていましたが、現在は約2300人です。

礼文分屯地について

昭和43年に開庁して本年で55年の節目を迎えました。部隊は島の北側、船泊地区の山頂に位置し、第301沿岸監視隊派遣隊、第301基地通信中隊礼文派遣隊、そして名寄駐屯地業務隊礼文管理班の3個部隊が所在しています。

戦略的価値について

礼文島は古くから戦略的に重要な地域であり、遡ると明治37年2月の日露開戦後、宗谷海峡を監視するために宗谷岬とともに、礼文島スコトン岬の丘上に海軍の監視所が設けられ監視隊が配備されました。

陸軍も昭和17年春、監視部隊を金田岬の丘上に進出させて木造平屋建ての監視所から7倍の双眼鏡をもって海空の監視に当たりました。また、昭和18年、礼文島に離島の防衛・警備のため、陸軍特設警備第309中隊が編成されて、終戦を迎えています。

現在においても、ここ北の彼方で依然として周辺国が常続的かつ連携を図った活動を見せており、第301沿岸監視隊派遣隊は24時間、365日、間断のない警戒監視、情報収集にあたっております。

生活環境について

礼文島外への交通手段はフェリーのみであり、1日に夏季3便、冬季2便が運航されます。

買い物は漁協の直営店、個人商店が主であり、コンビニは北海道が誇るセイコーマートが1軒（分屯地から車で25分）です。隊員の余暇の過ごし方は、買い物のほか、魚釣り、温泉、ランニング、山歩きなどです。

医療施設は診療所が2カ所、歯科医院も2カ所、教育施設は保育所から高校まであり、特に、礼文高校は寮が設備されているため、北海道外全国からの越境入学生徒も多数在校しています。

島内は児童・生徒数こそ多くはありませんが、みんな元気いっぱいです。

自然環境は分屯地が小高い山頂に位置している関係で、風の影響を受けやすく景色も夏季と冬季では全く違うものとなります。花々が咲き、心地よい季節の夏に比べ、冬は白一色の世界で防風雪の警報時は、視界がゼロ状態のホワイトアウトと高さ5㍍に達する雪の吹き溜まりが随所に生じて、自然の厳しさ、人間1人の非力さを痛感させられます。

また、他の道北勤務者も口々に「礼文の自然環境は、過酷だ！」と言います。

地域とともに55年
（地域との交流）

分屯地は開庁以来55年、礼文町自衛隊協力会とともに歩んで来ました。同協力会は、歴代礼文町長が会長を務められており、隊員の定期異動の時期には自衛隊と協力会が合同で歓送別会を実施しております。

また、家族会は道北自衛隊家族会稚内地区会の方々にお世話になっております。

分屯地として町内で実施される各種行事への参加、支援も積極的に行っており、神社例祭の神事では隊員が貴重な神輿の担ぎ手となっているほか、町内で開催される駅伝大会には2個チームを出場させて、毎回優勝しています。そして他チームからは「自衛隊さんに勝つぞ！」と目標にされています。

これらのことは分屯地先人たちの努力および島民のご理解とご協力の賜物であり、とても良好な関係の表れと認識しております。

分屯地司令室からの眺め

おわりに
家族会の皆さまへ

われわれはこれからも最北の自衛隊として隊員一同、過酷な自然環境を克服しつつ、北の第一線において国旗の下に頑張ってまいります。

隊員ご家族の皆さま、ぜひとも礼文島へ観光にお越しください。また、お子さま、お知り合いに陸上自衛官がおられましたら、礼文分屯地での勤務をお勧めしていただけたら幸いです。

礼文島へのお誘いをして結びといたします。

福島市（福島県）

4年ぶりに一泊二日の研修旅行
600㎞離れた青森駐屯地で研修

青森駐屯地での部隊研修

福島市自衛隊家族会（兒玉進市会長）は、4年振りに9月11日から12日の一泊二日の研修旅行を参加者32人で実施しました。

この研修は、遠く離れた地で勤務する福島市出身隊員の激励と部隊研修を目的にコロナ禍前には毎年開催していた行事です。コロナ禍の影響で4年ぶりの企画で、行き先は約600㎞離れた青森駐屯地です。勤務する隊員は櫻井秀平隊員と折笠紘季隊員の2人。目的地到着後、早速福島の特産品、旬の梨と銘菓をお土産に激励しました。

青森駐屯地は、本州最北の地で第9師団司令部とその隷下部隊が所在します。ブリーフィングを受け、旧軍時代の死の行軍の生々しい記録が多数展示されている防衛館を研修しました。

部隊研修の最後に、自衛隊の災害派遣時の安否確認などの「家族支援協力」が進展している青森県家族会にブリーフィングをお願いしたところ快く引き受けていただき、青森県家族会の会長（野呂和生会長）自ら説明をしていただきました。

私たちは、13年前の3・11東日本大震災を直接体験しました。その際に災害派遣命令を受け、家族や親族の安否を確認できないまま被災地に赴いた自衛官の心情を考えました。そこから私たち「家族会や隊友会」などの地元協力団体による災害派遣に赴く隊員への支援が必要不可欠であると感じ、支援体制の実現を切に望んでいます。

青森県家族会は、青森駐屯地部隊の災害派遣訓練と連携し、安否確認などを実行動により訓練し、留守宅との関連諸問題を検討されている状況を映像などで説明していただきました。その現況を容易に理解でき、十二分に成果を得て部隊研修を終了しました。

部隊研修後は、待ちに待った懇親の時間。青森ねぶたの家「ワ・ラッセ」見学、宿は陸奥湾を抱いた浅虫温泉で海鮮料理に舌鼓み、津軽三味線の生演奏を堪能いたしました。

2日目は、八甲田山ろくの酸ヶ湯、後藤伍長の銅像、十和田湖の奥入瀬渓流を堪能、最後に八戸にある最大の魚市場で食事をし、帰りには発泡スチロールの魚箱一杯にお土産を買い込んで青森を後にしました。

参加者から「来年は何処に行きますか」との質問責めに合い、次回の約束をした旅でした。

（福島市自衛隊家族会
副会長　後藤　啓行）

倉敷中央（岡山県）

倉敷フェアにおいて広報活動を支援
自衛隊グッズの販売を通じ広報に寄与

自衛隊グッズの販売

倉敷中央地区（片山輝男地区長）は10月1日、倉敷フェアにおいて自衛隊岡山地方協力本部倉敷地域事務所の広報活動を支援し、あわせて自衛隊グッズの販売を行いました。

当日は、秋空の下、倉敷みらい公園において倉敷商店街振興連盟のブースをお借りし、防衛省・自衛隊の防災パネル、携帯糧食などを展示し、来場者の興味を引いていました。

また、各種制服や戦闘服を試着しての記念撮影も楽しんでいただくとともに、中高生にはアンケートに協力いただき、有益な広報活動の一端を支援できたものと思っています。

さらに、家族会としては自衛隊グッズの販売を行い、幼児連れの若いご夫婦から年配の方、そして家族旅行中の外国の方までが足を止めて商品を手に取り、あるいは購入していただき、こちらの活動も広報に寄与できたものと思っています。

近年、防衛省・自衛隊に対する国民世論は約90%がその存在を肯定的に認めています。しかし、岡山県民における防衛省・自衛隊は近くて遠い存在のような気がします。それは、普段自衛官の制服や迷彩服姿をほとんど目にする機会がないためだと感じています。

そのためにも、今回のような広報活動の場があれば、家族会としても率先して支援し、多くの県民の皆さんに現役隊員の真摯な姿を目にして、防衛省・自衛隊が身近な存在と感じていただけるよう、これからも倉敷地域事務所の皆さんと相互協力して活動していきます。

（倉敷中央地区
地区長　片山　輝男）

三浦半島（神奈川県）

「横須賀夏季防衛講座」を共催
抑止力を強化し、戦わずに勝つことが大切

自衛隊OBや現役隊員も大勢参加

8月19日、横須賀夏季防衛講座が記念艦三笠の講堂で開催され、三浦半島地区会も横須賀地区防衛諸団体の一員として共催しました。

講師でお迎えした元陸上幕僚長の岩田清文氏による「日本の安全保障と課題～台湾・日本有事に備え、戦争を抑止する～」と題した講話はとても分かりやすく内容の深いもので、まさに台湾有事は日本有事ということを痛感させられました。「抑止力を強化し、戦わずに勝つことが大切。そのためには、戦略三文書の実行が不可欠」という言葉に、隊員家族としても深く考えさせられました。

講師の岩田清文元陸上幕僚長

講演会後は4年ぶりとなる懇親会も行われ、久しぶりに大勢の方々が顔を合わせ、みんな笑顔で会話を弾ませていました。

さらにその後は三浦半島地区自衛隊家族会の暑気払いを開催しました。

役員や会員、地域の募集相談員の方々と共に、地元の自衛隊の活動にとても理解のあるお店に赴き、長い時間をかけていろいろな方と和やかに、時には熱く語り合う、大変貴重な会になりました。

和気あいあいとした雰囲気での活動は、自衛隊家族会ならではだと思います。横須賀基地をはじめ武山駐屯地・久里浜駐屯地、武山分屯地など陸海空の自衛官とその家族が多く暮らす三浦半島地区は、隊員家族同士が強い絆で結ばれていることが大きな魅力です。

これからも絆を深めながら、さまざまな活動を通じて家族会を盛り上げていきたいと思います。

（神奈川県自衛隊家族会
三浦半島地区会　後藤　礼）

津（三重県）

津地区出身者の激励茶話会
先輩隊員を目標に、追いつき追い越せ

津地区出身の隊員を激励

津地区家族会は9月4日、久居駐屯地（司令・金子洋幸1等陸佐）において津地区より入隊した後期教育期間中の新隊員の激励会を行いました。4年連続の開催の当行事ですが、該当の隊員は今年は1人だけでした。

激励会開催に迷いはないものの、どのような形式でと悩んだ結果、ならば多くの人で激励しようとの結論にたどり着きました。

教育隊からは、激励隊員の谷口さん、中山付准尉および高木班長が、家族会側からは会長以下5人が参加して「激励茶話会」と称して行いました。

茶話会会場は、隊舎の憩いの場を提供していただき、ゼリーとジュースで和気あいあいの雰囲気の中、谷口さんの近況や今後の目標などをうかがいました。訓練で真っ黒に日焼けした精悍な表情で熱くしっかりとした考えを堅持されており、とても頼もしく心強さを感じました。

家族会からは、横山会長のあいさつ・激励、石原副会長からは家族会の説明をさせていただき、家族会はいつも応援していることをお伝えしました。

また、日本国民からの期待と声援を意気に感じていただき、さらなる研鑽努力されんことをお願いしました。

普段から、金子司令を始め教育隊長並びに教育隊基幹要員の方々には、ご支援をいただき心から感謝しています。

また、隊員さんに少しでも元気をお届けできるよう微力ながら今後とも激励会を続けていくことを誓って部隊を後にしました。

谷口さんが成長していく姿を見ることは私たちの喜びです。先輩隊員を目標に、追いつき追い越せと今後も応援し続けます。

（三重県自衛隊家族会
津地区事務局　小谷　文雄）

神奈川

前海上幕僚長の防衛講話
お堅い内容を分かりやすく説明

時間が経つのも忘れて聞き入る参加者

神奈川県自衛隊家族会（中條祐介会長）は9月10日、横浜の崎陽軒本店において防衛講話を開催しました。

講師は、前海上幕僚長の山村浩氏で「新たな防衛政策と我が国の安全保障～防衛三文書の概要と海上自衛隊の活動を中心に～」と題して行われ、神奈川県自衛隊家族会のほか、隊友会、水交会、神奈川県偕行会などを含め約120人が聴講しました。

初めに昨年改訂がなされた戦略三文書の概要について述べられ、改訂の背景や要点、今後の課題などについて、詳細な資料により大変分かりやすく説明いただきました。

次に講師が海上幕僚長として勤務された際、特に尽力された海上自衛隊における諸活動や部下指導などについて、多くのエピソードとともに紹介されました。

諸活動では、主要国はもちろんのこと、ヨーロッパや太平洋の島嶼国など実に多くの国々と現場レベルでの会議、訓練、親善訪問などを通じて、自衛隊の能力を向上させ、多くの国々と信頼関係を築くなど「抑止力の強化」をしっかりと実践されていたことが大変印象的でありました。

また、最後に部下指導の一つとして語られた任務、訓練などの後「きちんと結果を評価すれば、部下の疲労感、多忙感は一瞬にして達成感、充実感に変えることができる」という指摘については、人の教育、育成に関し、多くの参加者が大変感銘を受け、ペンを走らせる様子が随所にうかがえました。

昨今、新聞、テレビなどにおいて、大幅な防衛費の増額や反撃能力の保有に、わが国は軍事大国への道を突き進んでいるような印象を与える報道も見られますが、本講話を通じて、国としても、現場の自衛隊としても「しっかりと人を育て、強くなり、他国から信頼される、そして戦わずして勝つ」ということを目指している実態が大変よく理解できました。

わが国を取り巻く安全保障環境は戦後最悪ともいわれますが、今こそ、こうした機会を積極的に捉え、正しい知識、情報をもって、自国の安全保障について考えていくことが必要であると改めて痛感しました。

（神奈川県自衛隊家族会
大和地区会　水谷　宏之）

群馬

隊員家族の支援協力に関する協定締結
密接に支援協力するには、地方協定が必要

群馬県自衛隊家族会（叙持省司会長）は8月31日、相馬原駐屯地において、相馬原駐屯地司令（吉浦健志1等陸佐）、新町駐屯地司令（二見光俊1等陸佐）、自衛隊群馬地方協力本部長（小久保事務官）、群馬県隊友会（小島会長）の間において「群馬県隊員家族の支援に対する協力に関する協定」を締結いたしました。

中央協定で律されているとの認識の下、地方協定は締結しないで現在に至っておりましたが、やはり、密接に家族支援に協力するには、地方協定が必要との考えから締結に至りました。

締結に際しては、福岡相馬原駐屯地業務隊長の多大な尽力をいただきました。

今後は、この協定に基づき各駐屯地および地方協力本部の実施する家族支援に隊友会とともに、積極的に協力していく所存です。

（群馬県自衛隊家族会
会長　叙持　省司）

家族支援協定の締結式

大分

最新鋭護衛艦「みくま」の入港出迎え
大分県を流れる三隈川に由来する艦名

護衛艦「みくま」の前で記念写真

大分県自衛隊家族会（廣崎千都志会長）は10月7日、別府地区隊友会および別府市自衛艦入港歓迎協議会と共に別府国際観光港に入港した最新鋭護衛艦「みくま」（艦長・佐藤井信樹2等海佐）の入港出迎えを行い、県出身乗組員を激励しました。

また、艦内を広報していただき護衛艦の知識を深め、今後の家族会活動の糧とすることができました。

艦名は大分県日田市付近を流れる三隈川に由来するもので、三隈川は、日田市から下流の都市部への木材輸送などに使用され、神事や観光祭の会場としても親しまれています。当日は艦内神社に祀られた「みくま神社」の安全祈願をし、艦内神社の宮司、みくま高校教諭、日田三隈地区の観光協会の関係者なども出迎えました。

3月就役以降、大分でのお披露目の機会を検討していた中、この度、訓練の合間を見てようやく帰港することができたと艦長はじめ乗員は感慨深げに喜ばれている様子でした。

一般見学は8日のみで、雨天にもかかわらず大分の地名に由来することから関心も高く、約2000人の見学者が訪れました。隊員募集が佳境の中、入隊希望者の増と海上自衛隊に対する理解の増進につながったものと大いに期待できる広報となりました。

（大分県自衛隊家族会
事務局長　大城　伸吉）

石川

60人の夜間行進訓練を激励
被災地の復旧状況を見届けて、出発

小松市中海地区に集合し隊員を激励

石川県自衛隊家族会（中正章会長）は10月12日、金沢駐屯地普通科連隊第1中隊60人による夜間行進訓練を激励しました。

この訓練を激励するため、地元である石川県自衛隊家族会小松支部が中心となり、出発点となる小松市中海地区に集合し隊員への激励と支援を行いました。

この中海地区は昨年8月の集中豪雨により、集落全体が床上まで浸水した地区で、この時の復旧に市民ボランティアと共に金沢駐屯地から災害派遣を受けた地区でもあります。

1年が経った今でも一部の家屋がまだ復旧していない状態であります。この地を今回の行進訓練の出発点として選び、隊員は被災地の復旧状況を見届けて、終着点である「ふれあい健康広場」へ向けて出発しました。自衛隊家族会15人と一般市民5人が「がんばれ！」「気を付けて！」などの声を掛け、拍手で隊員を送り出しました。

われわれ自衛隊家族会は自衛隊の活動などに併せ今後も激励、支援活動を行っていきたいと思います。

（石川県自衛隊家族会
事務局長　俵　秀雄）

編集後記

▽1面、岸田総理大臣を来賓に迎え、自衛隊殉職隊員追悼式が厳かに執り行われました。志半ばで殉職された隊員の方々に追悼の誠を捧げます。

▽「回想」は「コロナ禍に学ぶ募集業務」。コロナ禍で対面での業務を封じられた中、自衛隊が人材を確保するために取り組んだ募集・採用広報活動をご確認ください。

▽8面「自衛隊の医療体制」特集を終了し、「離島の第一線勤務」特集を掲載しました。最北の自衛隊　礼文分屯地を一度訪れてみたいものです。

森林をそのまま生かした話題の自然共生型アウトドアパーク
FOREST ADVENTURE
フォレストアドベンチャー・美里
緑川ダム湖を見下ろす日本最大級のジップスライド！
森の中で本気でアスレチック!! 空中散歩を楽しもう!!
〒861-4703 熊本県下益城郡美里町畝野3083-1
美里町の静かな湖畔のキャンプ場
美里の森キャンプ場
ガーデンプレイス
Misato garden place
Wi-Fi完備で初めてでも快適！ロッジ、バンガロー、テント、あなたは何派？
〒861-4703 熊本県下益城郡美里町畝野2999-1
熊本県美里町 観光　検索
美里町役場 砥用庁舎 美しい里創生課
☎0964-47-1111